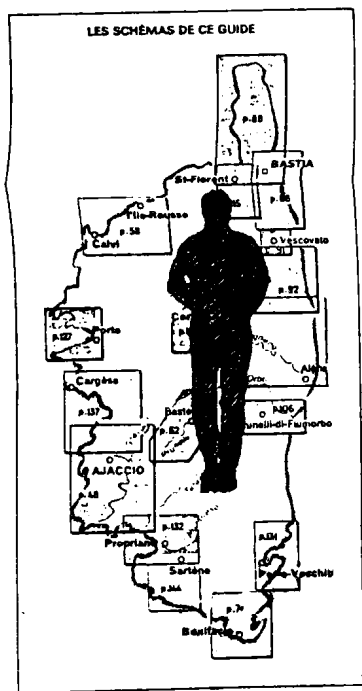


青春のブラックホール

出口富美子



講談社

著者略歴

(でぐち・ふみこ)

●一九四〇年北海道生まれ。
六人姉妹の三女。道立森高校
卒。高校一年の時、梶井基次
郎『檸檬』を読み、小説家を志
す。詩誌『たいある』(函館)、
同人誌『新未来』(東京)、同人
誌『表現』(函館)に参加。一
九八四年、道詩人協会とNH
K共催の朗読詩コンクールに
『卑弥呼口伝』で最優秀賞受
賞。二男二女の母。本名・砂
川フミ。現在、東京都練馬区
石神井の個人美術館「永瀬義
郎の館」に勤務。

青春のブラックホール

一九八四年十月五日 第一刷発行
一九八四年十月十五日 第二刷発行

著者——出口富美子

定価——一二〇〇円

装幀——鈴木信吾

© Humiko Deguchi 1984, Printed in Japan



発行者——加藤勝久 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三—三 郵便番号二三

電話 東京〇三—四四—二二(大代表) 振替 東京八—五〇〇

印刷所——株式会社慶昌堂印刷 製本所——黒柳製本株式会社

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りくださ

い。送料小社負担にてお取り替えます。(学二)

ISBN4-06-201507-2 (0)

長く陽の当たらぬ私の創作活動を励ましつづけてくださった
恩師・安東璋二先生に、この本を捧げます。

YOKOI・KOSAKAとの出会いによって、一九八二年は私にとって忘れられない一年となった。彼はフランス外人部隊で現在なお活躍する日本人青年である。

私は単なる興味本位で彼とかかわったのではない。戦争を知らない世代から、プロの戦争屋に身を投じた男に対し、深い疑問を抱いたがゆえの追跡だった。なぜ平和な日本、平和な日々を捨てねばならなかったのか。彼の世代で戦争はどう咀嚼そじぐされ、何が彼らの世代をしてそこに走らせたのか。

この「なぜ」の解明のため、青年の実像を求めて、愛知、岐阜、横浜、東京、そしてパリ、コルシカ島カルビへと私は飛んだ。

これは、その一年間の、私のあるがままの報告書である。多くの子を持つ親たちに、若者たちに、平和を心から願う方々に、これを読んでいただけるなら、これにすぐる幸せはないと思う次第である。

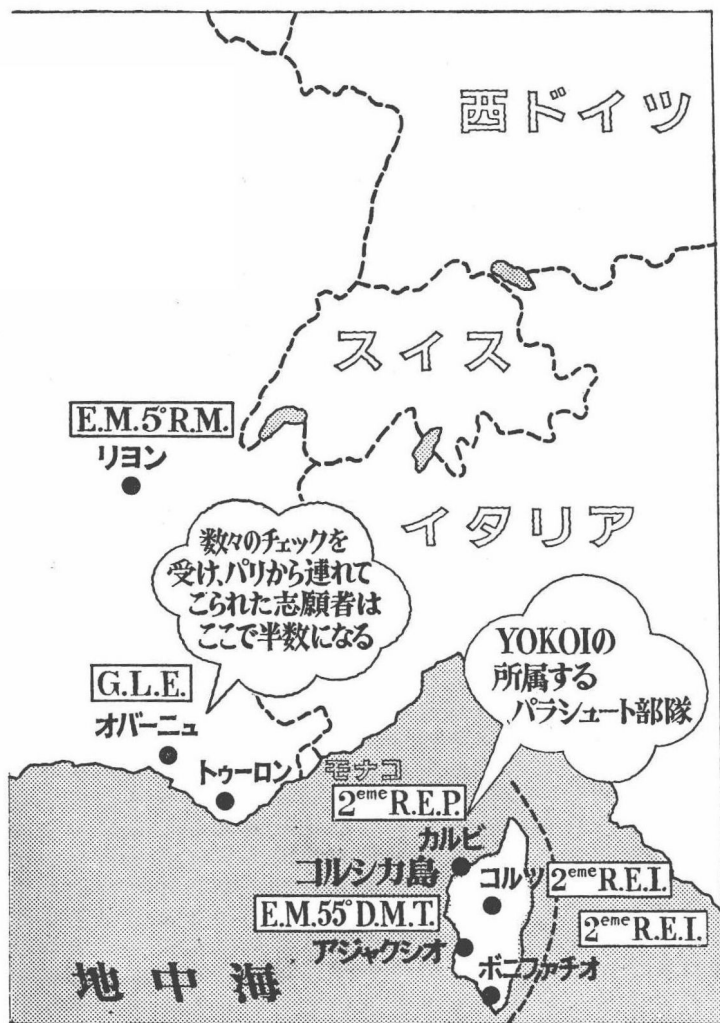
なお、登場人物、日本国内の地名に関しては、全ての人のプライバシーを考えて仮名および、地名変更をしたことを、お断わりしたいと思う。それは、取材の最初の段階での当事者との約束を守りたいと思うからだ。

目次

11	発端
18	取材拒否からの出発
24	タイム・トラベル
30	青年YOKO ^{ヨコ} ー ^イ
40	フランス外人部隊の日本人
46	現代日本のフラックホール
49	八月七夕 ^{たなばた} の街
61	カナダの皮ジャン
68	・戦場は明日君のもの・
76	国際監視軍としてベイルートへ？
84	最初で最後の二人の旅

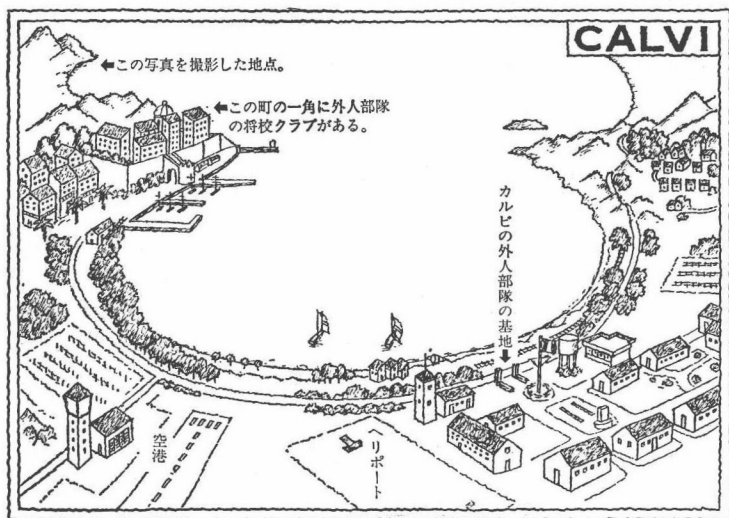
158	149	144	133	128	124	119	113	109	104	100	96	90	85
国籍不明の男	捨てる神あれば	パリ支局K氏の叱責 しっせき を受ける	パリへの序奏	友人の中のYOKO	高田君の手紙	板長の土井氏 いたちう の話	四人の教師の証言	シネマと観客	狂気の沸騰点	範疇外 はんちうがい のヒーロー	岐阜市へ	黄色い肌ゆえに	入隊後の往復書簡

163	檻 おり の中の豹 ひょう のように
169	「人間ですらなくなった」
174	「日本に帰りたい」
180	G少佐に会う
185	日本武士道を賞揚 しょうよう される
192	フルータス、お前もか！
199	正規軍と外人部隊のギャップ
205	もうひとりのYOKOO
214	逃げろ！
221	城塞 じょうさい の街カルビに渡る
227	「君はなぜ戦場を選んだか」
233	「裏の不幸はおれの知ったことか」
240	YOKOOたちよ、自分の足で走ってくれ！
247	あとがき



フランス外人部隊の主な配置図





発端

一九八二年四月三十日、私は愛知県A市への出発を明日に控え、旅行荷物の点検を急いでいた。時計は早くも深夜十二時近くまで歩を進め、日付けの指は五月の最初の蓋をこじ開けようと爪先を鋭く伸ばしていた。

私の旅の目的はフランス外人部隊162・723の認識番号を持つ「YOKOI・KOSAKA」なる青年に関する取材だった。これはもちろん偽名だ。国籍も中国と記載されているが、彼はれっきとした日本人なのである。ただし、これは取材後初めて知り得たことだ。出発時点で私が把握し得ていたことといえば、わずかに青年の本名と彼の父親の名、生家の住所、職業、屋号、電話番号、それと青年の出国直前の簡単な背景と経緯くらいだった。

この旅で私と行動をとにもする一歳四ヵ月の息子は、どこへ連れて行かれるかも知らず、たあいもなく安らかな眠りに就いていた。

そもそも事の発端は一ヵ月前、三月二十九日、青年の父親であるO氏と偶然知り合う機会に恵まれたことから始まった。氏との出逢いの細かな経緯は省くとして、私はその時、春を訪ねる子連れの小旅行の途中にあった。O氏と会話した時間はわずか一時間くらいと記憶する。

氏は私と同じ四十代かと思われた。中背小肥り。色浅黒く丸顔。活気が漲るみなぎ艶やかな額に座り

の良い鼻。柔和な大きい眼と上下均等な厚さの皺のない唇など、非常に印象に残る風貌の持ち主で、一見して商人と見わけのつく明快な雰囲気をもった紳士だった。

「フランス外人部隊に入っている長男の生き方を、親の手で文字か映像によってぜひ記録しておきたい。具体的に助力してくれる人間を捜しているのだが……」

それが氏の秘めた宿願であった。

「フランス外人部隊……ですって！」

私は氏の言葉に白昼亡霊でも見たかのように絶句していた。聞いた瞬間、私は一九八二年現在のことであるとは信じられなかったのである。

なぜならば、恥ずかしい話、私はその瞬間までフランス外人部隊が今なお存在し、活躍している事実を知らなかったのである。一九六二年のアルジェリア独立を契機にその部隊は解体され、消滅したように聞き及んでいたし、そう信じ込んでいたのだった。自分の認識不足に対する激しい恥の意識と意外性が重なって、私のショックは大きかった。

「記録……といいますが、ドキュメントで……」

そう訊くのがやつとであった。

「できればドキュメント風に追ってみたい」

氏はそう思い立った動機について青年の婚約者との別れのいきさつをあげた。

高校時代からの交際が実り、彼女が短大を卒業するのを待って挙式、という状況の中、突然入

隊宣言をし、狂乱状態で哀願する彼女を振り切つての出国であつた。その際の婚約者の悲嘆の姿が脳裏に焼きついて離れない。

「辛かったですね。人の子の親として魂が絞られる想いでした。撮れるものなら撮っておきたかつた。どんな名画もその比ではない気がしました。二人の別れの場面だけでも、小説や映画のひとつふたつゆうにできます。恋人を戦場に送り出すわけです。五年間一切の音信ができない。死ぬかも知れないのですから」

アホらしい。私は腹の中で舌打ちした。

第一、氏の感覚はズレていると思われた。どのような事情にしろ、他人の色恋の修羅場というもの、第三者の眼から見ると、結局は滑稽このうえもない喜劇でしかないものだというのが私の醒めた持論であつた。

しかも、このカッブルの場合、何の障害もなく相思相愛で結婚に向かつていたのだ。青年の突然の外国軍傭兵の件は、国家権力によって強制されたものでもなければ、生活が貧しいゆゑに外人部隊に身を売らねば道がなかったわけでもない。青年も女性もともに中流の上クラスの家庭に育ち、男には自立した職業があり、双方の親たちは結婚して一日も早く落ち着くことを望んでいたのだ。そのような状況下での突然の入隊宣言は、これはいわば男の一方的身勝手だ。そんな酷い男に「死ぬかも知れぬ戦場に恋人を送り出す」ロマンが感じられるものか。別れには悲しみの涙でなく、唾吐く憤怒がよく似合う。有事に直面した自国のためにやむにやまれず銃をとったとい

うならまだしも、フランスくんだりの傭兵に身を売って出て行く男との別れに狂乱する女があったとして、多少の同情心はそられもするが、絵にも話にもならないことなのだ。

O氏は自分の胸中にある計画を何らかの形で具体的に実現させてくれる「実行者」をひそかに捜し求めているようであった。私は完全に気持ちが悪くは退いてはいたが、とりあえず話だけは聞いた。その際名刺をもらった。

「入隊を打ち明けられるその瞬間まで、私には自信があった。男同士として自分が一番息子を理解しているとの自負があった。だが、それが錯覚であったと認めざるを得なかった時のショックは筆舌に尽くしがたい。息子に関して私は何もわかつてはいなかったのです」

O氏の談話中この述懐だけが私の心に妙に生々しい印象となって強く残った。

事は終わったかに見えた。その小旅行中私は一度もその件に関して思い返すことなく過ごした。ところが、旅を終えた直後不意に私の中にひとつの疑問が湧いた。そして、それは時間の経過とともに重く熱く私の心を圧した。

「……で、反対はなさらなかったのですか」

「もちろん反対しました。しかし全て手遅れだったのです。その決心を私どもに打ち明けた時、息子はすでにフランス外人部隊と入隊契約手続きの一切を終えてしまっていて、相談ではなく事後報告だったのです。契約破棄は脱走罪に充当する罰則が適用されるというので、もはや反対してもどうにもならないとあきらめたのです」